

おとなりはライバル？

蒲原 ユミ子

サッカーの試合時間はあと数分！

結衣^{ユイ}は哲と守とパスのやりとりしながらゴールに向かっていった。哲はキック力が強くパスが正確なのでシュートを決める役回りだ。

相手チームの三人のトップが結衣のボールをねらってかこんできた。この三人はとてもチームワークがいい。三人が同じ人物のようにたくみにボール運びができる。結衣は守にパスすると見せかけ、フェイント（だまし）をかけ、哲にキックした。哲はボールを受けとめるや、ナイスシュート！

そのあと、ボールが相手チームにわたされ、敵の三人のフォワードが絶妙のフォーメーションでゴール近くまで運び、エースが上の枠すれすれにシュートした。しかし、ゴールキーパーの早紀がジャンプして受けとめ、結衣にパス。しかし、ホイッスルが鳴って試合終

了。

2 対 0 で結衣チームの勝ち！ 結衣たちはみんな腕を組み、「おーし！」と言って喜んだ。その頭上を数匹の赤とんぼがせんかいしてから青空に消えた。

「ただいま！」

試合からもどった結衣は店先に声をかけた。「おかえり。今のところ、配達はないよ」

店先でビールケースを整理しながら母がどなった。母は『小川酒店』を女一人で切りまわしているたくましい「肝っ玉」母さんだ。結衣に似て体が大きくて力持ち。

結衣はキッチンでおやつチョコパイを食べると、二階の自分の部屋に行った。そして、ベットに寝転ぶと、（きょうの哲ちゃんのシユートと早紀ちゃんのカットは最高だったなあ）と、しみじみ勝利のよいんを楽しんだ。

壁にはカレンダーの十二月五日が赤丸でかこんである。ジュニアサッカー県大会の日だ。

去年は準決勝までいき、三対一でやぶれた。
「今年こそ、優勝して全国大会へ出よう！」
と、早紀や哲たちとちかい合っている。きょうはもう八月二十九日。夏休みはあと二日だけ。

宿題はサッカー練習のためとつくに終わらせてある。結衣はベットから起き上がった。

（よし、フェイントの練習をしよう）

去年は相手チームのキックフェイントにほんろうされたのだ。結衣がボールを持って階段をおりかけた時、下から母がどなった。

「結衣、早くおいで！ おとなりさんがあいさつにみえたよ」

玄関へ急ぐと、そこにがっしりしたおばさんと結衣より背の低い男の子がいた。母子の後ろで、母が（早く自己紹介しなさいよ）と目くばせした。結衣は営業用の笑顔を作った。「こんにちは。小川結衣です。小学五年生です。よろしく願いします。」

すると、おばさんがはきはきしゃべり始め

た。

「はじめまして。お隣に住むことになった秋山です」

そして、側の男の子をつついた。男の子は、
「ぼくは秋山俊シユンです。小学五年生です。どうぞ、よろしくお願いします」

かた苦しくロボットがしゃべったような声だ。こい眉毛と強いまなざし、ぎゅつと結んだ口もとから、結衣は（ずいぶん勝気そうな男子ね）と思った。おばさんがつけたした。

「俊は三年生の時、突発性難聴にかかって耳が不自由なんですよ。それで、口話、相手の口元を見て読み取るんですけどね、それを猛特訓して、やっと普通学級へもどってきたんです。いろいろとお世話をかけると思いますが、よろしくお願いしますね。ご面倒でも、俊に用がある時は、正面でお話ししてくださいね」

結衣は目の前のきかん気そうな男の子が耳が不自由と聞いてびっくりした。おばさんが

続けた。

「それで、俊は土曜日には養護学校に通い、口話や手話の勉強も続けるんです」

土曜日は結衣の大好きなサッカー教室がある。結衣はひそかに『なでしこジャパン』をめざしている。待ちに待った土曜日にも、俊は養護学校に行っているなんて大変だなあと思った。結衣の母が明るく言った。

「シュンくん、なにか困ったことがあったらなんでも結衣に言ってみてね。うちは早くに父親を亡くしたのでたくましく育てたから、頼りがいがあるわよ」

すると、俊の目がぎろつと光り結衣を見たが、すぐにぎゅつと口元を結んだ。俊のお母さんはうちとけたように話した。

「この子の父親はシンガポールに赴任中なので、母子二人住まいなんです。俊もがんじょうに育ててあります。なにかとお世話になると思いますのでよろしくお願いしますね」

「こちらこそ。うちは健という中三の受験生

の息子とで三人です。片親でしつけが行き届いていませんが、よろしくお願いしますよ」

母は片親片親と言うわりには元気よく、じいちゃんから受けついで酒屋『小川酒店』をしつかりやっている。結衣はさびしい思いをしたことがない。

父は結衣が二才の時、病気で亡くなり、まったく父の記憶がない。スポーツマンだった父は母と恋愛してむこに入ってくれたそうだ。結衣の顔や性格は父に似ていると言われるが、仏壇に飾ってある父の写真を見ても、（そうかなあ？）と思うだけだ。

俊の母子が帰ると、母はさっそく結衣に用を言いつけた。

「二丁目の桜井さんここに米と焼酎を届けておくれ」「はあい」

結衣は店にまわり、五キロの米袋二つと二リットルの焼酎のボトルを荷台の籠に入れた。近所への配達は結衣の仕事だ。前は兄の役割だったけど、兄が中三になってからは結衣が

受け持っている。結衣の家では『働かざる者、食うべからず』で、食事作りやそうじもすっかり責任を持たされている。そうでなくても、スーパーや郊外の大型店の進出で経営が難しくなっているのだから。母はサービスと信用でほそぼそ『小川酒店』を続けているのだ。そして、母は、「重い荷物を運ぶのは筋トレになるし、お得意様にあいさつするのもサツカーに役だっているんだよ」が口ぐせだ。まあ確かに、重い米袋やボトルを運ぶのは筋トレにはなる。あいさつは社会勉強かなあ。ともかく、配達に行くと必ずのように、「えらいね。うちの子にも見習わせたいよ」などとほめられるのは悪い気がしない。

結衣は米袋と焼酎をすっかり固定して出かけようとしたら、兄が学校からもどってきた。「おかえんなさい」と結衣が言ったけれど、健はちよつとまゆを動かしたただけで返事をしなかった。試験の結果が悪いと、健は機嫌が悪くなる。それは結衣の知ったことではない

のでむしして自転車をこぎ始めた。

九月一日。担任の井上先生が俊を教室に連れてきた。俊はみんなの前に立ち、井上先生は黒板に大きく、『秋山俊くん』と書いた。そして、俊にあいさつするように目でうながした。俊は大きな声でしゃべり始めた。

「ぼくは秋山俊です。耳は聞こえないけど、相手の口の動きで読み取ります。ぼくに用がある時は、ぼくの目の前でしゃべってください。お願いします。」

俊は教科書を読むようにいつきにしゃべり、しゃべり終わるとふうつと息をついた。家でよほど練習してきたにちがいない。教室には（へえ〜）とか（だいじょうぶなの？）とかいった空気が流れた。井上先生はにこにこして続けた。

「俊くんは耳が不自由だけど、ぼくも知らない口話や手話ができるから、ぼくもそういうのも勉強しようと思う。ちよつと年を取り過ぎていくけどね」

井上先生は結衣たちからするともうおじいさんでかっこよくはないけれどおだやかでいつも笑顔だから、結衣は好きだ。

「俊くんになにか質問のある人？」

と井上先生が聞いた。みんなは顔を見合い、誰も手をあげない。ふつうの転入生ならすぐ質問が出るのに。先生が打ち切ろうとした時に、おつちよこちよいのタケシが勢いよく手をあげた。

「好きなキャラクターはなんですか？」

すると、俊は眉をしかめ言った。

「悪いけど、もう一回言って」

井上先生がつけたした。

「ゆっくりはつきりしやべってな」

タケシがもう一度大きな声で言うのと、俊はこくりとうなずき、「ドラえもん」とこたえた。教室のあちこちから「くすり」という笑い声がして、今まで緊張していた空気がゆるんだ。結衣は（ようちなおとなりさんね）と思った。サッカー少年の哲が聞いた。

「サッカーは好きですか」

すると、俊の顔がこわばり一息ついてから、
「サッカーはやりません」

と言いきゅつと口を結んだ。哲はがっかりした顔をした。そのあと、もう質問が出なかった。井上先生は俊に席を教えた。隣は世話好きの早紀だ。早紀は結衣ほど背は高くないけれど、反射神経がばつぐんなサッカー少女だ。結衣と大の仲良しでもある。

休み時間になった。ふつうの転入生だとまわりには近よらず遠くから何気なく俊のまわりには近よらず遠くから何気なく俊のようすをうかがっている。俊は教室内をじろじろ見まわしていたが、そのうち、ついと教室を出ていった。

休み時間が終わっても、俊はもどってこなかった。井上先生はちよつと首をかしげ、
（そのうちもどるでしょう）という感じで授業を始めた。俊は十分くらいおくられて帰ってきた。

井上先生が、

「どうしておくれたんだい？」

と聞くと、俊はじいっと井上先生の口元を見ていたが、

「学校中を歩き回ってきたんです」

と悪びれずにこたえた。井上先生は叱らずに、
「そうかい。それで、これからよく使う音楽室や理科室も頭に入ったかい？」

と聞いた。すると、俊は初めてにっこりして、「はい」と言った。井上先生も満足そうにならずいた。

授業中、俊は食い入るように先生を見ているが、あらぬ方向を見てぼうっとしていることもある。結衣は（口元に集中して読み取るのは神経を使っつつかれるんだろうな）と思った。

俊は転入してから三、四日たつと、校庭にも出るようになった。ほかの男子と何かするわけでなく、俊はトラックを走るのだ。ゆっくり走ったり全力疾走したり、遊んでいる子

ども達の間をうまくすりぬけている。結衣は俊の足のフォームがきれいなのに驚いた。難聴になる前は陸上でもやっていたのだろうか？

それから、二三日後に運動会練習が始まり、リレー選手がえらばれた。結衣は一年からずっと選手。今年ももちろん選ばれた。おどろいたことに、俊が男子の中で一番速かった。ずっと一番できた哲はひどくくやしがつていたが、俊はそれほどうれしそうでもなく、当たり前と言う顔をしていた。結衣は俊にひどく興味がわいた。

学校から帰ると、結衣はボールを持って裏庭に出た。結衣は早紀や哲のように学習塾などに行っていないので、暇がある。でも、相手がいない時は一人で練習をやるしかない。インステップ、インステップ、アウトステップとボールを転がしていった。

そのうち、ボールがころころとお隣の庭の方へ転がっていった。結衣はボールを拾いに

行き、はっと目をこらした。お隣との間には低いフェンスがあるだけ。お隣の庭は木が多いのだが、色づき始めた柿の木の前に、俊がいる。俊は両手を構えたり足をびゅうんと蹴りだしたりしている。なにかの武道だ。俊は目の前に相手がいるかのように次々と構えを変え、手足を鋭く動かしている。強い眼差しでまわりの空気を切りさくように動いていて、結衣はびっくりし感動した。あまりすごすぎて声をかけられなかった。

運動会練習たけなわの時、また俊がチャイムが鳴っても教室にもどってこなかった。一時間過ぎてももどらないので、さすがの井上先生も、

「じゃあ、みんなでそうさく隊になろう」と言っ探し始めた。結局、俊は給食近くなあって鍵のかかった屋上から発見された。屋上のドアが開いていたので屋上に出て探検していたら、知らないうちにドアの鍵をかけられ

てしまったそうだ。先生は俊の家にも電話していたので、俊のお母さんがやってきて俊をしかった。

「人様にあんまりめいわくをかけると、学校においてももらえないよ！」

と大きな声でしかり、バッグがら何か取り出して俊に持たせた。

「だから、いつもこれを持っていなさいと言ってるでしょう」

「何ですか、それ」

井上先生が聞いた。お母さんは照れくさそうに笑いながら見せた。小さな笛だった。

「ほら、氷山にぶつかって遭難した豪華客船の映画があったでしょ。主人公が冷たい海の中で笛を吹き続けて助けてもらえて」

井上先生はくすりと笑い、俊に顔を近づけて言った。

「これは強力な助っ人だ。ぼくの商売道具でもあるけどな」

結衣は俊のお母さんはちよつと楽しい人だ

と思った。

あしたは隣町のサッカーチームと強化試合がある。

結衣はいつもの配達をすませると裏庭に出た。結衣はふとお隣の庭を見た。柿の木の前で俊がれいの武道をやっている。結衣はボールを足でとめて俊を見た。いつもながら俊の動きは鋭く流れるようでほればれする。一連の動きが終わったのか、俊は合掌した。それから、結衣の方を見た。結衣はどきりとしたが、笑ってフェンスに近づいた。俊は離れて立ったままなので結衣は手まねきした。俊はすうっとやってきた。結衣が聞いた。

「今やっていたのは、何というの？」

すると、俊はきよろつと目玉を動かし、

「少林寺拳法」

と言った。結衣は首をかしげて「ええっ？」と聞き返した。俊は言葉を区切って言った。

「しょう・りんじ・けん・ぼう」

どこかで聞いたことがあるような気がする。

結衣は正直に言った。

「じょうずだねえ、すごかったよ」

俊はにかつと嬉しそうに笑った。結衣はもつと俊と喋りたいけど、思いつかない。俊は手持ちぶさたにしている。俊が家にもどりかけたので、結衣は思わず言った。

「あんだ、サッカーやらない？ あんたならいい線いくよ」

すると、俊は眉をよせて（なんだって？）という顔をした。結衣はゆっくり大きな声で言った。

「あんだ、サッカーをやらない？ あんたなら将来、Jリーグ確定だよ」

すると、俊はひどく顔をしかめた。なにかいやなことを思い出しているようなこわい顔だ。サッカーになにかいやな思い出があるのだろうか？ 話を変えた方がいいのかなあ？ その時、母が裏口からどなった。

「また、お仕事だよ！ 公園わきの佐藤さん

ちまで」

そして、俊に気づくと、「話し中なのに悪いね」と言っていてガハハと笑い、俊に手をふつてから引っこんだ。俊はおこった顔のままだ。

結衣は俊の気分が変わるようなことを言いたかったが思いつかないので、「またね」と言っていてボールを持ち店先に向かった。

運動会が終わった。紅白リレーでは赤組の結衣はもちろんがんばったけど、今年は白が勝った。一年生から六年生までいっしよなので仕方がない。白組の俊はすごい走り二人抜いていた。

学校はいつもの授業スタイルにもどった。井上先生は朝の「おはようございます」や帰りの「さようなら」のあいさつに手話を取り入れてやるようになった。また、「総合」の勉強で、手話のできるボランティアの人を呼んで手話の意義や日常会話を紹介して練習させたりした。女子も男子もいっすか手話に興

味を持って、休み時間にも遊び半分到手話を使ったりしている。

そんなある日、土曜日のサッカー教室が終わった後、哲は結衣と早紀を呼びとめた。ひどく緊張した顔だ。

「おれ、九月いっぱい転校しなくちやあならないんだ」

結衣ははじめ何のことかわからなかった。早紀がさげんだ。

「じゃあ、十二月五日の県大会には出られないってこと？」

哲はひどくつらそうにうなずいた。結衣は言った。

「それって、じょうだんよね」

哲は泣きそうな顔になった。早紀が聞いた。

「いつ、決まったの？」

「夏休みに入ってすぐ。お父さんに転勤命令が出たんだ」

結衣は頭がくらくらしてきた。エースの哲がいなくなったら優勝はきびしい。

「もっと早く教えてくれればよかったのに」

と、早紀がぼやいた。そしたら、作戦やフオリメーションを変えて練習できたかもしれないが、それでも優勝はきびしいだろう。

ふと、結衣は気がついた。(わたしは優勝できないから哲の転校がいやなの？ それってすごく自分勝手。哲ちゃんだって転校したくてするわけでないのに。哲ちゃんは言いにくくてずっと悩んでいたに違いないのに：)

哲は小さく、「ごめん」と言って走り去った。早紀はあきれたように、「どこかからいい選手、さらってこようか」と冗談を言った。

結衣は家にもどり、おやつを食べるとボールを持って裏庭に出た。やる気は全く出ないが習慣で庭に出てしまう。おとなりではいつものように俊が拳法をやっている。このごろ、時々俊とフェンス越しに話すようになった。俊のお父さんは少林寺拳法の黒帯を持った拳

士で、俊は三才から習ったそうだけど、なんかぶつとんでいておもしろいのだ。俊の拳法が終わった時、結衣は急に俊に哲の転校のことを話したくなった。結衣が手招きすると俊がすうっとやってきた。その時、ドアが開いて、母は俊にっこり笑ってからどなった。「酒井さんとこまで！　ちよつと遠いけど頼むよ」

結衣は（あくあ）と思ったが、しかたない。俊に手をふって店先にまわった。酒井さんは一人暮らしのおじいさん。米・みそ・しょうゆなどまとめて配達する。気難しそうなおじいさんだけど、こわい顔したまま結衣に必ずおだちんをくれる。出かける間に母が結衣に耳打ちした。

「おとなりの俊ちゃん、難聴になる前はサッカーのすごい選手だったんだって。難聴になつてサッカーをあきらめたって、俊ちゃんのお母さんが教えてくれた。だから、あんた、サッカーの話して俊ちゃんをうらやましながら

せちやあダメだよ」

結衣はびっくりした。なんだなんだ、俊はサッカー大好き少年だったのか！ エースの哲は転校しちゃうけど、おとなりがもつとすごい選手だったなんて……。母がせかした。

「わかったら、さっさと配達、頼むよ」

結衣は哲と俊のことがごっちゃになり、混乱したまま自転車の荷かごに荷を積んでから出発した。車の多い表通りから裏通りに入り、無事に酒井さんに荷物を届けた。酒井さんはおだちんをくれたあと珍しく、「これから寒くなるから風邪ひかんようにな」と、自分の孫にでも言うように結衣に言った。それなのに、結衣はろくろくお礼も言わないで自転車にまたがった。

表通りから『小川酒店』のある路地へ左折しようとした時、いきなりトラックが左折してきた。結衣は逃げる間もなくトラックの後輪に巻きこまれていった。

結衣はベッドの上で目ざめた。のぞきこんでいる母の目と合った。母の顔がくしゃつと なった。泣きそうになった口元をぎゅっと引きしめてからしゃべった。

「どうだい、気分は？」

結衣は目玉を動かしまわりを見た。母と並んで兄の健が神妙な顔してかしまっている。ここは病院の一室で隣にも向かいにも人が寝ているようだ。結衣は事故のことを少し思い出した。後輪に巻きこまれた後のことはおぼえていない。両手は動くが、右足がしつかり固定されている。顔にも何かはられている。「わたし、どうなっちゃったのかなあ」

結衣はかすれ声を出した。母は笑った。

「どうってことない。右足が一本折れただけさ」

「そう？」

結衣はまだよく実感できない。母は強いまなざしで結衣を見た。

「人間、命さえあればなんとかなるもんだ。」

これだけですんでありがたいと思うよ」

「ん：」

結衣は自分がどういう状況か認識できなかつた。そんな結衣の手を母は両手でぎゅうつとにぎりしめた。母の顔を見ると、母の目からぽろぽろっと涙があふれでた。結衣は母の涙を見るのは初めてだった。母は素手で目をこすり、

「おやまあ、玉ねぎをきざんだわけでもないのに」

と言い、笑い顔を作ったが、泣き笑いになった。側で、健が怒り顔で言った。

「おまえのうるさい声が聞こえないと勉強がはかどらないから、リハビリがんばって早くもどってこい」

結衣はやっと自分が交通事故で入院したのだと実感した。

それから一ヶ月、ともかくも結衣は退院して家にもどってきた。

久しぶりに自分のベットのの上に寝ころがった。松葉杖で歩けるようになったけど、まだ通院しなければならぬ。骨はくつついたけれど、足首のすじがうまくつながっていないのだ。県大会には出場できそうもなくて、結衣は落ちこんでいた。

学校の友だちはよく見舞いに来てくれたし、早紀はしよっちゆうメールをくれて、「早くいっしょにプレーしようね」とはげまし続けてくれている。転校していった哲も「おまえなら必ず復帰できるぜ」とメールくれた。けれど、今の結衣は暗い湖の底に沈んだカメのように気だるかった。

お隣の俊は一度も見舞いに来てくれなかった。ずっと待っていたのに……。

夜、病室のベットの上で目がさめて眠れなくなつた時、まわりのしんとした闇がいやだった。どうしても、(このまま元のように歩けなくなってしまうのだろうか?)などと悪い方へ考えてしまう。俊はとつぜん難聴に

なってサッカーをあきらめなくてはならなくなり、どんなに残念だっただろう。

代わりにというか、俊のお母さんが結衣の好きな鶏のから揚げとアップルパイを持って見舞いに来てくれた。「あの子ったら、病院がきらいでごめんなさいね、大事なお隣さんなのに」と何度も謝っていた。結衣は残念だったけど、「いいですよ、病院を好きな人はいませんか」と、おばあさんをなぐさめた。

「健、頼むよ！」

階段の下で母がどなった。しばらくして、健がどどどと階段を下りていった。今は結衣の代わりに健が配達しているのだ。受験生だけど、仕事優先だ。母が過労で倒れたらそれこそ受験どころでなくなるから。それに、健は結衣に、「なぜか、配達した後の方が勉強がはかどるんだぜ。勉強だけしていればいいわけでないんだなあ」と言った。

それはまんざらうそでもなく、健は結衣と

いっしょにサッカーしていたころのようなさっぱりした顔にもどっていた。

結衣は机の上におかれたおやつチョコパイを食べた。お見舞いにもらったもので、結衣の好物なのにあまりおいしく感じなかった。このごろ何を食べても前のようにおいしく感じられない。わけはわかっている。運動不足のせいだ。

結衣は机の上のサッカーボールを見た。ボールはなんか色あせて生気がない。(一ヶ月もさわってないからなあ...) 結衣はボールを手を取った。ボールのひやつとした弾力が手の平から伝わってきた。(ちよつと転がしてみようか)

結衣はボールを持ち、松葉杖をつきながら階段を慎重におりた。裏庭に出て、ボールをそつと地面に置いた。そして、骨折した右足をその上に置いた。(ああ、この感じ、やっぱりいいな！)

結衣はボールをインサイドで転がそうとし

た。ところが、足は空を切り、ボールにさわ
りもしなかった。二度目もダメ、三度目でや
っとボールにふれ、ちよつとだけボールが動
いた。はいはいしている赤ちゃんがさわった
程度だ。結衣は落ちこんだが、またやってみ
た。ボールを転がすのが習慣だったので、気
持より足が先に動いてしまうのだ。ボールは
思ったように動いてくれなくてもしばらく続
けていた。

つかれたので、ふと眼をあげると、隣のフ
ェンスから俊がのぞいている。結衣は思わず
そっぽを向いた。ところが、俊が手まねきし
た。結衣はへそを曲げていたけれど、手招き
されると無視できなかった。松葉杖を使って
ひよこひよこ近づいていった。

俊は目玉をぎよろぎよろさせて言った。

「あんた、少林寺拳法をやってみないか？」

結衣はおどろいて叫んだ。

「こんな足でやれるわけないでしょ！」

俊はひどくまじめな顔で言った。

「片腕がなくてもやれるし、両腕のないすごい拳士もいるんだ」

「でも、わたしは足が悪いのよ」

すると、俊はふうんとバカにした目つきになった。

「その足は永久にそのままなのかい？」

結衣はどきりとして何も言えなかった。本当だったらどうしよう？

「仮にそのままだとしても、自分の可能性をすてるのは自分を殺すことだぜ」

俊に似合わずまじめな正論だ。結衣は当たり前のことを言われて言い返せなかった。

「おれはずっと少林寺拳法の相手がほしかつたんだ。あんたがサッカー練習の相手を欲しかったと同じでね」

結衣はおどろいた。俊が自分を拳法の相手に考えていた？ 俊の顔をまじまじと見ると、俊がにやりと笑ってうなずいた。すぐには信じられなかったけど、結衣も思わずうなずいてしまった。

「少林寺は相手あつての武道。相手あつての自分なんだ。それに、自分の未熟なところを受け入れ、あきらめないのが一番大事だと先生が教えてくれた」

結衣はまじまじと俊を見た。自分より背の低い俊がちよつと年上のように感じた。その俊がさりげなく言った。

「おれもそろそろサッカーを再開しようかなと思う」

俊の言葉がすぐには結衣にはつうじなくて、（ええっ？）という顔で俊を見た。すると、俊がにやりと笑った。

「好きなことはやれるところまでやった方がいいからね」

やつと、結衣の頭に、俊の言った言葉が入ってきた。結衣はびっくりして体中の力が抜ける感じだった。松葉杖が手からはなれ、体がよろめいた。俊はあつという間にフェンスを飛び越え、結衣を支えた。結衣は俊の筋肉質の腕に抱かれた。すると、なんだか、結衣

にじわじわと力が湧いてきた。事故にあつて以来、はじめてモチベーションがふつふつと盛り上がってきた。(少林寺拳法にもちようせんしてみるか)

結衣は松葉杖をつきなおし、俊をまっすぐ見つめて笑った。

「あんたって、ほんとに人をおどろかすのがじょうず。きっとフェイント名人なのね」

サッカーの県大会は初戦でやぶれた。

けれど、ベンチで応援していた結衣は満足だった。俊のサッカーを見ることができたから。俊は耳の不自由さをアイコンタクト、それに仲間たちとの事前の打ち合わせで補っていた。仲間たちとの「あ・うん」のれんけいまでにはまだまだだけれど、結衣は俊の力強いキックやドリブル、巧妙なフェイントには目をみはった。主治医に年が明けたらサッカー練習を再開してもいいとも言われた。結衣にもりもり闘志がたぎってきた。

（俊、わたしはあなたのライバルになるからね！）